

# 天プラ式サイエンスカフェの試み

平松正顕(東京大学) & tenpla.net

## Abstract

私たち天プラ(天文学とプラネタリウム)では、これまで様々なサイエンスカフェを企画、実行してきた。街中の小さなレストランでの来場者10数名のものから、書店における参加者150名超のもの、飛行場併設のカフェレストランと共同開催したものなど、その形式は多岐にわたる。これら多数の試行により、さまざまなスタイルのサイエンスカフェの可能性を見出すとともに、それぞれのスタイルにおける利点、およびどのようなサイエンスカフェでも共通して使えるノウハウの把握も可能になった。ここでは、天プラがこれまでに実行してきた様々なケースを紹介し、その中から見えてきた天プラ式サイエンスカフェの仕組みを紹介する。

## AIM of TENPLA SCIENCE CAFE

サイエンスカフェを含む天プラの活動を貫く活動方針は、『天文学/科学の面白さを、より多くの方に知っていただき、一緒に楽しむこと』である。天文学は古来より人の心を捉え続け、現在も新発見のニュースが比較的頻りに紙面を飾り、冥王星の話題が大きく取り上げられたのは記憶に新しい。しかし、そのような話題の裏に、さらに興味深く私たち人間にも密接に関わる広い世界があることは、必ずしも広く知られてはいない。そこで私たち天プラは、サイエンスカフェを含む様々な方法で、天文学の楽しみを広げていく活動を行っている。

なお、天プラの活動については、「サイエンスコミュニケーションのさまざまな試み」展示内のポスター『天プラの挑戦』をご覧ください。サイエンスカフェ以外にもグッズ開発や地域協力による科学コミュニケーション活動をご紹介します。

## SCIENCE CAFE with STAR PARTY

開催日：2005年8月  
開催場所：国立天文台三鷹キャンパス 会議室  
来場者数：約50名

天プラ初のサイエンスカフェは、国立天文台定例観望会に併設した「天塾サイエンスカフェ」である。普段は大学院生が最先端天文学の講義を行う「天塾(あまのじゅく)」の場を借り実施した。天体写真や天文シミュレーション画像を駆使するとともに、大学院生を場内に大量投入するという形を取った。来場者を小グループに分けることで「人前で質問する」という心理的ハードルを取り除き、さらに学生をスタッフとすることで権威感をなくし来場者との密なコミュニケーションが可能になった。

 **スタッフ大量投入による対話の活性化**  
**学生の起用による科学への親近感の醸成**

## SCIENCE CAFE with RESTAURANT

開催日：2005年10月  
開催場所：レストラン みんたる (札幌市)  
来場者数：約15名

イベントを数多く開催しているレストランでのサイエンスカフェ。小さな店内にプロジェクタを持ち込んで、天文の大学院生の研究と日常の紹介を行った。15名程度の参加者であったため、参加者同士あるいは参加者と話題提供者との会話がはずみ、天文学とそれを研究している大学院生への興味を喚起することができた。さらに、日頃からもっていた宇宙に対する質問などにも対応し、2時間以上にわたって和やかかつ闊達なコミュニケーションが行われた。



 **小規模開催による対話の活性化**

## SCIENCE CAFE with BOOK STORE

開催日：2005年10月  
開催場所：紀伊国屋書店札幌本店 (札幌市、JR札幌駅となり)  
共催：北海道大学科学技術コミュニケーター養成ユニット (CoSTEP)  
来場者数：150名超

CoSTEPのサイエンスカフェ札幌を共催した。著名天文学者とCoSTEPスタッフの対談の後、学生のショートトークとフリーディスカッションのセットを4回行った。場内には天プラスタッフが天体写真を持って飛び込み、全体では出にくい質問の対応を行った。壁に天文シミュレーションを、天井に天体写真を投影し、雰囲気盛り上げるとともに、人通りの多い札幌駅周辺でのサイエンスカフェ開催を広くアピールした。



 **学生ミニトークによる話題提供**  
**スタッフ大量投入による大規模開催への対応**

## SCIENCE CAFE with AIRPORT

開催日：2005年12月  
開催場所：調布飛行場  
来場者数：約50名

調布飛行場プロペラカフェとの協力により開催。カフェ内で天文に関するミニトークや質問コーナー、天プラ開発グッズによる科学遊びを体験したあと、広大な駐機場に出て飛行機+星空の案内、ふたご座流星群の観察を行った。天文ファンと飛行機ファンの双方にアピールできる重要なイベントとなった。また、第1回の成功を受け、第2回を今年7月に実施し、第3回も年明けに計画中である。現在は親子がメインの客層であるが、大人向けやカップル向け、シニア向けなど様々なターゲットを区切った多様なサイエンスカフェを実施することにより、サイエンスカフェそのものの浸透を図るとともに、天文学や科学を普段は意識しない層に対しても積極的にアピールし、興味の喚起が可能になる。



 **地域の特殊/異業種施設との協力**  
**イベント付設による無関心層の効果的取り込み**  
**ターゲットを明確に意識した最適化**

## SCIENCE CAFE with ART MUSEUM

開催日：2006年4月  
開催場所：大原美術館本館 展示室 (岡山県倉敷市)  
来場者数：約30名  
科学技術週間に合わせて開催された学術会議サイエンスカフェの一会場。天文学とローマ史研究の第一人者の対談と会場を移してのフリートークタイムにより、格調高い文化の一翼としての科学を意識させながらも、自由な意見交換や対話ができるよう工夫した。また、全国一斉での開催はメディアに対するアピールも大きく、科学に触れる場としてのサイエンスカフェが広く浸透したと思われる。



 **“科学に触れる新しい形”としてのカフェ**

## SCIENCE CAFE with LOCAL PEOPLE

開催場所：国立天文台三鷹キャンパス付近のレストラン  
来場者数：数名  
地域でのサイエンスカフェも複数実行した。非常に小規模な開催であるがゆえに自由な意見交換が可能であった。この企画は地域で活動する市民NPOとの顔合わせの場でもあり、今後の協力に向けて私たちがどんな人間かを把握してもらうものとして有効であった。今後、地域NPOとの協力により、地域に根ざして持続可能な企画の進展が期待できる。

 **協力の手段としてのサイエンスカフェ**

## FUTURE of TENPLA SCIENCE CAFE

『サイエンスカフェを如何にして成功させるか』から『サイエンスカフェという形式をどう使いこなすか』へ

以上の企画実行から、天プラは様々な形式のサイエンスカフェにおける実行ノウハウを得るとともに、その後の大きな展開の可能性について探り始めたところである。今後は、これらの試行を元により効果的なサイエンスカフェの開催方法、サイエンスカフェから広がる科学コミュニケーションの可能性、サイエンスカフェとその他科学コミュニケーション活動の有機的な結合の方法を探りながら、一歩先のサイエンスカフェを探っていきたい。

info@tenpla.net

www.tenpla.net